

フィリピンにおけるろう文化

山下 恵理

目次

はじめに

1. フィリピンにおけるろう者の歴史
2. フィリピンろうコミュニティの現状
3. フィリピンろう文化の諸相をとらえるために
ーフィリピン研究におけるろう文化という視点

はじめに

本稿の目的は、これまでほとんど研究されることのなかった、フィリピンにおけるろう文化（Deaf Culture）のあり方を考察して検討することで、フィリピンろう文化の諸相を捉えるのに必要な視座を提示することである。ろう文化とは、ろう者を聴覚障害者（deaf）ではなく、手話を母語とするエスニック・マイノリティ集団（Deaf）として捉えるもので、アメリカ合州国で提唱されて以降、手話やろう者のみならず障害者一般に対する認識にパラダイムチェンジをもたらし、欧米を中心に世界に広がったものである¹。ろう文化が主張されるようになった背景には、音声言語の不完全な代替と見做されてきた手話が自立した文法体系を持つ言語として言語学的に説明されたこと（Stokoe 1960）、（音声）少数言語の話者（言語的少数派）の擁護やエスニック・マイノリティ集団の権利獲得運動が戦後世界で隆盛したことがある。

しかしながら、ろう文化概念は大きな影響力を持って世界に広がってきたとはいえ、非欧米社会におけるろう文化研究は発展途上の段階にあるといつてよい。手話は音声言語に勝るとも劣らない多様性を持つものである以上、手話を母語とするろう者の文化＝ろう文化も無数にあるはずだが、欧米のろう文化が研究モデルとなってしまうとあり、諸地域に根ざすろう文化の多様な実相はほとんど等閑視されてきた感がある。確かに、アジア、アフリカにおけるろう文化が近年注目されてきてはいるが、欧米を中心に発展してきたろう文化概

念が、非欧米地域に波及する過程でどのような影響をもたらしたのかというろう文化概念の交空間的な歴史性、各地域におけるろう文化の独自の発展については、精覈な研究は発表されていないのが実情なのである²。とりわけ、本稿で扱うフィリピンを含め、東南アジアのろう文化については、関連資料の制約もあり、体系的な学術的研究調査はほとんど未着手の状態にある。

フィリピンのろう文化は、ろう文化研究の先端地域である合州国の影響を受けて発展した。それゆえ、フィリピンろう文化は、非欧米地域におけるろう文化概念の普及を見る上で、非常に重要なケースであるといえよう。しかし、フィリピンのろう文化研究は萌芽段階であることもあって、フィリピン独自のろう文化の存在を主張すべくフィリピン手話の社会的認知を主眼に置いた研究が中心であってきたため、フィリピン手話の言語学的分析をはじめ、当事者の視点を考慮したろう者コミュニティの調査が精力的に進められてはいるものの³、ろう文化研究総体としては未着手な部分や、取り上げきれていない研究課題が山積されている。

そこで本稿では、こうした問題を前提として、フィリピンにおけるろう文化の研究視角を提示すべく、フィリピンろう文化の受容と変容の考察を試みるが、その構成は以下になる。一章ではフィリピンろう文化の固有の歴史性を顧みる。

² アフリカの手話教育・ろう文化の先進的な研究者である文化人類学者の亀井伸孝は、こうしたことを試みている数少ない研究者の一人である（亀井、2006）。とくに複数の欧米人/団体が関与する形でろう教育が始められたカメルーンの例を取り上げ、現地に生きる人々の状況を見ていくことで、欧米で構築されたり文化パラダイムの有効性限と界性を探る試みは、本稿に大きな示唆を与えている（亀井伸孝「手話と植民地:カメルーンにおけるろう教育の事例から」障害学研究会関西部会第6回研究会、大阪府大阪市東住吉区、大阪市立早川福祉会館、2000年5月6日での口頭発表）。

³ 森壮也は、長年にわたるフィールドワークを通し、フィリピンの社会状況を踏まえたろうコミュニティの研究で多くの成果を上げている（森、2005）。またフィリピンでは、Liza B. Martinezを中心にフィリピンろう文化に関する報告が精力的に行われている（Abat and Martinez、2006）。

¹ 日本では、ろう文化という呼称は、市田泰宏・木村晴美「ろう文化宣言」（市田・木村、1995）を嚆矢として広く知られるようになった。ろう文化に関しては、パディ・ラッドの研究（Ladd、2003）を参照。

二章では現在のフィリピンろうコミュニティの言語的複雑性を示しつつ、フィリピンのろう者がこうした状況下でいかに手話以外の方法でアイデンティティを獲得しようとしているのかを述べる。三章では、植民地支配および国家の福祉政策によってフィリピンにはきわめて複雑な言語状況が生じ、そのなかでろう者コミュニティが発展したため、フィリピンろう文化の複雑な諸相を考察するには、従来のろう文化概念には限界があり、先に述べた交空間的な歴史性の分析やろう者コミュニティのエスノグラフィーが必要不可欠であること、手話という言語を基底にしてろう文化を捉える現在のろう文化研究のフレームワークではフィリピンのろう文化を描き出すことは困難であるが、逆にフィリピンという地域性に着目することで、手話に還元されないろう文化を研究するための新たなパースペクティヴを見いだせることについて論じる。

1. フィリピンにおけるろう者の歴史

1.1 植民地教育とキリスト教

フィリピンは7000以上の島から構成され、国語はフィリピン語、公用語を英語としており、8つの主要言語を含め、100以上の言語があるといわれている多言語社会である。スペイン、アメリカ、日本による度重なる植民地支配を通じた宗主国言語の普及が、こうした複雑な言語状況を生み出す要因となった。歴史上ろう者に関する記述が初めて登場するのも、スペイン植民地支配がはじまる16世紀のことである。カトリック修道会イエズスの記録保管所の文書に、1590年代にレイテ地方(ビサヤ)のデュラックという町で、2人のろうのフィリピン人がスペインのイエズス会の神父、レイムンド・プラド(Ramon de Prado)からカトリックの教義を学び、洗礼を受けたと記述されていることから、マルティネスは、このときフィリピンろうコミュニティとスペイン手話に接触があったと推察し、アバットはイエズス会が来比する以前からろう者コミュニティが存在していた可能性を指摘している(Abat and Martinez, 2006: 4)。

16世紀は、世界においても、ろう教育の黎明期といえる時代であった。特にスペインでは世界に先駆けて、ろう者に対する教育方法が開発された

⁴。そうしたろう教育の発展の背景には、ろう者がキリスト教における「慈悲」の対象と位置づけられたことがある。フィリピンにおいて、ろう教育がキリスト教を通して始まったことで、ろう者の概念規定もスペインから引き継いだことが推察される⁵。

そののち再びろう者に関する記録が現れるのは20世紀初頭である。1900年代初期ころ、米比戦争のさなかに来比した教育監督官フレッド・アトキンソン(Fred Atkinson)は、ろう教育の必要を提唱し、これにより1907年からおよそ15年にわたりディライト・ライス(Delight Rice)が、アメリカ手話による教育を任ぜられ、現在のフィリピンろう学校(PSD)の基礎を築いた。1921年当時コモンウェルス以前の政府は26万ペソをこの教育機関のために割いたことがわかっている(森、2005: 16)。1926年には、フィリピンろう協会(PAD)が創設され、ろう者はフィリピンろう教会へ集結された。フィリピンにおけるろう者の社会化は植民地支配とそれに付随するミッションによって生じたことがわかる。

1.2 ろうコミュニティと国家

フィリピンのろうコミュニティに「黄金期」があるとすれば、それはマルコス政権下でのことになる。ろうコミュニティに対し、政府から多大な社会福祉予算が投入されたのである。このため、70年代はPADがフィリピンのろう文化の中心として栄えることになった。76年には、最初のアジアろう者会議が、フィラム・ライフ(Phi-lam Life)会館で開催され、世界労連盟の当時の連盟長も出席した。この会議を記念して、同年10月にはろう啓発週間という大統領声明がフィリピン政府によって発されている(森、2008: 303)。

PADの主な収入源となっていたのが、リサーチ

⁴ ポンセ・デ・レオン(Ponce de Leon)が教育方法を確立し、ファン・パブロ・ボネット(Juan Pablo Bonetti)が指文字を開発する。こうした手話の歴史に関しては、Nicholas Mirzoeff(Mirzoeff, 1995)やPer Eriksson(Eriksson, 1998)を参照。

⁵ ただしAbatは、自らのろう者としての経験をもとに、1590年代当時、ろう者は一方的に「教育」されたのではなく、プラド神父に現地の手話を教える代わりとして、スペインの手話を学んだのではないか、という「通訳者」としてのろう者像に関する仮説を立てている(Abat and Martinez, 2006: 5-7)。

公園にかつて存在したろう者が経営・運営するコーヒーショップ（ろうカフェ）である。リサール公園は、イントラムロスに拠点を置いたスペイン人の支配者達が、暴動を恐れ、人々が押し寄せて来る姿が遠くまで見渡せるように緩衝地帯として造営されたものである。現在では、国家の英雄ホセリサールの像が立つマニラを代表する観光スポットであり、国立国会図書や観光局、国立博物館など、フィリピン文化のショーウィンドー的な位置づけだが、ここにろうカフェが設営されたのである。*People of the Silent World* (1976 年) は、PAD がろう者の権利を主張するために出版した本であるが、そこには 1970 年代当時もっとも繁盛していたときのろうカフェの状況が記されている。この店は経営者から運営（コック、ウェイター、ウェイトレス）に至るまで、すべてがろう者によって担われるという世界でも類例を見ないもので（ちなみに聴者の客はオーダーを紙に書いた）、開店当時は 300 名のろう者によって一週間ではぼ 100 万人もの客に食事を提供するという規模であった。

しかも当時のリサール公園では、ろう者以外に精神疾患の患者や盲者らにも仕事を与えられていた。つまり「障害者」が働くリサール公園のろうカフェは、充実した福祉制度を示す、独立国家が国威を誇示するための一種のショーウィンドーの中心にほかならなかった。またその一方で、このろうカフェはさまざまなろう者が集まり情報のやり取りをするハブとしても機能しつつ、聴者に対して独自の言語を持つろう者という存在を社会的に可視化し、認知させる場所でもあった。

リサール公園における国威のショーウィンドーとしての華々しいろう文化のあり方は、マルコス政権の崩壊とともに終わりを告げ、PAD も解散の憂き目に遭う。90 年代には、リサール公園のろうカフェも閉鎖に追い込まれてしまう。PAD の代わりにろう者の中心団体となったのが、カトリック系のろうの宣教者団体である CMD を核に結成されたフィリピンろうあ連盟（PFD）である。この PFD は現在でもフィリピンろう文化の中心となっている。フィリピンのろうコミュニティは、ミッションとナショナリズムが絡まり合いながら維持されてきたのである。

2. フィリピンろうコミュニティの現状

フィリピン政府統計によれば、フィリピンにおける聴覚障害者の人口は 12 万 1000 人に達する。しかしながら、フィリピンろう連盟の統計によれば、ろう者人口中、手話を習得しているのは 975 人でしかない (WFD 2008)。フィリピンには公立・私立を含めた 200 のろう学校が存在するにもかかわらずである（日本の聴覚障害者の教育を目的とする特別支援校の総数が 106 校であることを鑑みれば、フィリピンのろう学校数は決して少ないわけではないことがわかって）。こうした背景には、政府がろう学校で聴者の教師が教育に使うピリピノ手話 (Pilipino Sign Language; PSL) を早い段階で手話として認定したものの⁶、実際のろうコミュニティでは自分たちが日常的に使うフィリピノ手話 (Filipino Sign Language: FSL) こそが、ろう教育に使われるべき本当の手話であると考えていることによる (森、2008)。実際、2012 年には下院にフィリピノ手話をろう教育に用いるべきだとする FSL 法案 (HB6079) が提出されている。

こうしたフィリピンにおける手話の普及の難しさには、いくつかの要因がある。まずは、フィリピンの地理上の問題がある。7000 以上の島を有するフィリピンにおいては、同一手話の教育機関を通じた普及は音声言語以上に困難である。つぎに、ろう教育に用いられてきた手話の多様性がある。70 年代後半には SEE と呼ばれる手指英語が導入されたが、この SEE は聴者の言語体系に則ったもので、聴者教師がろう者を教育するためのものであった。現在、フィリピンの聴者研究者や、ろう者団体は、FSL の普及に努めているが、筆者が今回のフィールドワークでインタビューした際には SEE の使用を認めるろう者もいた。日本では、音声言語に則った手話（対应手話）への反発は大きく、ろう者にとって自然な言語（自然手話）である日本手話の使用が主張されており、聴者の手話通訳者らにおける普及が訴求されている。しかしながら、フィリピンにおいては、ろう者が就職を行う上で英語を習得することが重要視されているため、SEE を真っ向から否定することができない

⁶ 特別支援教育政策ガイドライン第 5 条 1.4.1 項には「聴覚障害者の教育にはピリピノ手話 (Pilipino Sign Language; PSL) をもちいるべき」と記されている。

という事情がある。

さらにフィリピン社会では、フィリピン語の読み書きは使用率が低く、英語がよく使われるため、ろう者コミュニティでも聴者フィリピン人とコミュニケーションをとる際には、英語とフィリピン語の単語を使わざるを得ず、否応なしに使用する言語は多様化するということがある。また、地域によって異なる手話が使われおり、フィリピン手話それ自体が極めて多様であることも、フィリピンろう文化の言語的特殊性といえよう。

このように複雑で多様なフィリピンろう者の言語状況は、欧米や日本のろう文化と違って、「手話言語」をフィリピンのろう文化におけるアイデンティティの中心に据えることを難しくしている。このため、フィリピン独自のろう文化を主張するのに、手話の固有性に還元されない「フィリピン性」を自分たちの文化の中でどうとらえていくのか、ということがろうコミュニティにおいて関心の的となっている。

たとえば、1992年に創立されたフィリピンのろう者劇団 *Dulaan Tahimik* (DTP 静寂の劇場) は、現在ではフィリピンの若いう者を対象とする舞台芸術活動を通じたエンパワーメントを行っているのだが、そこでも「フィリピン性」は常に関心の的になっている。2014年に著者が DTP の代表ミラ・メドラーナ (Myra V. Medrana) に行ったインタビューで、当初は *Theatre of Silence* という英語のグループ名だったのを *Dulaan Tahimik* というフィリピン語に変えた理由について「自分たちの書き言葉は英語で、使用している言語は FSL であっても「フィリピン人」として結束するため」と述べた。また、「私たちのろうコミュニティには、難聴者、中途失調者らも存在し、彼/彼女らと母語手話者であるろう者がひとつのコミュニティで共同するためのタームとして「フィリピン」が必要である。私たちの言語はアメリカで使われているものであっても、私たち (フィリピンろう者) の体には、共有されているものがある」とも述べた。さらに、こうした「フィリピン」のあり方は、同グループが行うダンスの主題の中にも現れている。

本例で見られるように、フィリピンろうコミュニティは彼/彼女らを取り巻く言語の複雑性を前提に、手話以外の面でのコミュニティの結びつき

を探究してきたと言える。こうした試みにおいて浮かび上がってくるのは、自分たちの「フィリピン性」をどう考えるのかという問題である。

アメリカのろう活動家たちは「障害を抱えた肉体の欠損を示す、支配のための分類枠」を無意味化することをめざして小文字の *deaf* ではなく大文字の *Deaf* を用い、さらには自らの文化の中心に手話という「言語」を据えることで、ろう者の権利を主張した。ところが、フィリピンろう者が自らの権利を主張するための拠り所となるべき「言語」は、一章の歴史で明らかにした通り、アメリカ手話を母体に発展したフィリピン手話であった。このため、フィリピンろうコミュニティの当事者(およびろう文化研究者ら)は「フィリピンには独自のろう文化があるのか」、「独自の自然手話というものが存在するのか」という問いにさらされ続け、フィリピン独自のろう文化の存在を主張するために、フィリピンろう者は手話の固有性に還元されない「フィリピン性」を自分たちの文化のなかに探究し続けることになっているのである。

言語＝理性を崇拝する西洋の言語観において、手話は非言語的であるとされ、ろう者は「野蛮な言語」を使う者として差別されてきた。こうした言語観において、ろう者が社会的な承認を要求するには、手話を音声言語と同等な自立した固有の言語であり、ろう者はそうした手話を使うエスニック・マイノリティ集団であると主張する戦略がとられなければならなかった。しかし、これまで論じてきたように、フィリピンのろうコミュニティの紐帯は単一手話だけによってはいけないため、ろう文化の中心に言語(手話)を据えることには限界と困難がある。しかしこうした限界や困難は、フィリピンにおけるろう文化が軟弱であったり、劣っていたりすることを示すものでは決してない。むしろ、こうしたフィリピンのろう文化における確固としたアイデンティティの基盤を希求することの難しさは、これまでろう文化が看過してきたものを露わにしていると考えべきなのだ。

この意味で、フィリピン大学の人類学者 Nestor Castro の主張は重要である。Castro は *Understanding Deaf Culture in the Philippines* の中で、フィリピンろう者の言語社会、地方ごとの言語と文化の違い、教会における手話の使用、映画

祭などのろう者の活動を観察することを通じて独自のフィリピンろう文化を探り出し、言語がエスニシティを作るという幻想を解体する可能性を指摘しつつ、現在の言語を中心とするろうコミュニティは「想像の共同体」でしかなく、deafness（耳が聞こえないこと）を彼/彼女らのエスニシティとして考えることを提唱しているというのである（Floyd、2008）。

3. フィリピンろう文化の諸相をとらえるために—フィリピン研究におけるろう文化という視点

これまでのろう文化概念においては、ろう者のエスニシティは「言語」というアビリティに結び付けて考えられてきた。フィリピンにおけるろう文化の根源にあるものとしてdeafnessを想定する過程には、本稿で振り返ったフィリピンろう文化特有の歴史を前提とすることが欠かせない。そしてそこからこうしたフィリピンにおけるろう文化論研究を深化させるには、宗主国と植民地という軸を参照しつつ、フィリピンの国民国家形成においてdeafnessがどのように捉えられてきたのかを前提にフィリピンのろう文化を考察する必要がある。フィリピンのろう者コミュニティは、本稿で論じてきたとおり、欧米のろう文化とは異なる固有の文脈を持っている。フィリピンにおける手話を中心に据えるろう文化形成の困難さは、ろう文化論自体が抱えている「地域性」という視点の欠如を映し出したものにほかならない。

そもそも、従来のろう文化論は、西洋の哲学、言語観と深く結び付いて欧米で発展してきたものである。そこでは、聴者による言語的植民地支配へのカウンター・ナラティブとして、聴者—ろう者という対立構造が重視されてきたが（Paddy、2003）、それは決して普遍的なものではなく、欧米という地域に固有の特殊性なのである。

フィリピンにおいては、その構造に重なるようにしてフィリピン—アメリカという軸が存在する。一章で明らかにした通り、アメリカは侵略戦争のさなかから教育を植民地支配の柱に据えており、音声言語においても小学校から大学までアメリカのカリキュラムに従って英語で授業が行われていた。1905年アメリカ陸軍長官ウィリアム・タフト（William Taft）は「私は諸君に独立を付与するた

めに来たのではなく、諸君の福祉を調査するためにやってきた。諸君の準備が整った時、独立することになるが、それは今の世代ではあるまい—いや次世代でもなく、今後100年はないかもしれない」と述べた。この意味で、「ろう者」という言語を持たないと見なされた人々をアメリカ手話によって啓蒙することは植民地政府の使命（ミッション）に最適なものであっただろう。“言葉を持たない”障害者とされたろう者を“言葉をもつ理性的”な存在にすることは、「アメリカという父のもとで、いかにしてより文明化され、より民主的となりかくして独立の準備が整うようになるのかを学ぶ」（イレート 2004: 40）、といういわゆる友愛的同化の一部として、植民地経営を象徴する格好の装置となっていたに違いないからである。

フィリピンにおけるろう文化形成の過程をたどることは、ろう文化論に新たな視点をもたらすことにとどまらない。ろう者がいかなるアイデンティティを希求してきたのかということに光を当てることは、アメリカ帝国がフィリピン支配においていかなる存在を「他者」としたのかを再分節することになり、これまでのフィリピン研究の主要な関心事であったフィリピン人の「アメリカ化」という宗主国と植民地という二項対立的な観点を相対化し、従来のフィリピンの民族アイデンティティ論にオルタナティブな視点を提供しうるからである。

そのためには、本稿で論じた植民地主義における福祉教育を背景に、複雑で多様な言語環境を生きるフィリピンろう者がどのようにろう文化を実践的に作り上げているのかを、より体系的な資料調査とろうコミュニティの精緻なエスノグラフィーによって分析することが必要不可欠である。そしてそれは著者が何よりもまず取り組むべき課題としてあることは言うまでもない。

（やました えり・東京外国語大学大学院博士後期課程）

参考文献

Abat, R. M. and Liza B. Martinez

- 2006 “The History of Sign Language in the Philippines; Piecing together the puzzle,” *9th Philippine Linguistics Congress*: 1-8.

Eriksson, Per

- 1998 *The History of Deaf People*, Orebro: Dauf. (=2003、中野善達・松藤みどり訳、『聾の人びとの歴史』、明石書店)

Floyd, Padilla,

- 2008 CSSP names Writing Fellows. Online. URL:<http://www.upd.edu.ph/~updinfo/octnovdec08/articles/cssp.html> (03/05/2015)

現代思想編集部

- 1996 『現代思想 臨時増刊号 総特集 ろう文化』第24巻5号、青土社。

市田泰宏・木村晴美

- 1995 「ろう文化宣言」『現代思想』第23巻3号、青土社：354-362。

亀井伸孝

- 2006 『アフリカのろう者と手話の歴史』明石書店。

Ladd, Paddy

- 2003 *Understanding Deaf Culture: In Search of Deafhood*, Multilingual Matters. Philippine Association of the Deaf
1976 *People of the Silent World*. Makati: Philippine Association of the Deaf, Inc.

World Federation of the Deaf and Swedish National Association of the Deaf

- 2008 Global Survey Report. WFD Regional Secretariat for Asia and the Pacific. Global Education Pre-Planning Project on the Human Rights of Deaf People. World Federation of the Deaf. Finland.

イレート、レイナルド

- 2004 「フィリピン革命史研究からオリエンタリズム批判へ」、永野善子編・監訳『フィリピン歴史研究と植民地言説』：5-124、めこん。

森壮也

- 2005 「フィリピンのろう社会のあけぼの」『手話コミュニケーション研究（特集：フィリピンろう者社会の動向）』56: 12-21。
2008 「フィリピンのろう教育とろうコミュニティの歴史—マニラ地区を中心とした当事者主体の運動の形成と崩壊、復活—」、森壮也編『障害と開発：途上国の障害当事者と社会』：291-317、日本貿易振興機構アジア経済研究所。

Ladd, Paddy

- 2003 *Understanding deaf culture: In search of Deafhood* Clevedon: Multilingual Matters. (=2007 森壮也監訳、長尾 絵衣子・古谷 和仁・増田 恵里子・柳沢 圭子訳、『ろう文化の歴史と展望—ろうコミュニティの脱植民地化』、明石書店)

Lane, Harlan

- 1984 *The Deaf Experience: Classics in Language and Education*, Auflage: Harvard University Press.
(=2000、石村多門訳、『聾の経験：18世紀における手話の「発見」』、明石書店)
1993 *The mask of benevolence: Disabling the deaf community*, New York: Random House. (=2007、長瀬修訳、『善意の仮面：聴能主義とろう文化の闘い』、現代書館)

Mirzoeff, Nicholas

- 1995 *Silent Poetry: deafness, sign and visual culture in Modern France*, Princeton: Princeton University Press.

Stokoe, William

1960 *Sign Language Structure: An Outline of the Visual Communication Systems of the American Deaf.*

Buffalo: University of Buffalo.

1979 *A Field Guide for Sign Language Research*, Mary Land: Linstok Press.